

view point

THE SAISON FOUNDATION

64

セゾン文化財団ニュースレター第64号
2013年8月31日発行
<http://www.saison.or.jp>

公益財団法人セゾン文化財団

The Saison Foundation Newsletter — 31 August, 2013

目次

- 小池博史◎旅を巡って——サバティカル雑感…………… p.01
- 手塚夏子◎根を張る日々…………… p.06
- 松岡和子◎つなごうとする意志——2013年上半期の舞台を見て…………… p.10

Article—①

旅を巡って ——サバティカル雑感

小池博史
Hiroshi Koike

まだまだ世界は広く、そして極端に狭くなった。それを強く実感したのが2012年度にセゾン文化財団からの助成を頂いて、スペイン、モロッコ、セネガル、イスラエル、タイと歩いた旅だった。

ぼくは今までにパパ・タラフマラでは35カ国、個人的な会議出席やワークショップ、旅を含めれば60カ国程度は動いてきた。だが、公演ツアーやワークショップのために出るときは、どうしても多くの制約がまとわりつき、さほど世界を知ることはできない。目的はあくまでも公演やワークショップで、そこに向かって最大限のことをすることである。毎年、繰り返し出て行ったにも関わらず、劇場周りとその都市の一部

を知ったに過ぎない国は数多い。

旅について

旅はひとりで歩くに限ると思ってきた。誰か相手がいると、どうしても共有せざるを得ない時間が生まれ、楽しくもあるがすべての感覚が分散しがちで、自己との対話は生まれにくい。たとえば……メキシコの、真っ青な空の下、片田舎の一本道を歩くでしょう。熱せられた大地を嗅ぎ、目は光を、鮮やか過ぎるほどの色彩を捉える、足は道を踏みしめる感触を、耳はその音を、からだ全体は熱を受け止めて汗が噴き出すとき、ファン・ルルフォやオクタビオ・パスのことばがフツと風のように過ぎて、その意味を痛いほど知る。たとえばグアテマラの空港から朝一の飛行機でサンパウロに向かう。そのとき、早朝に頼んでおいたタクシーが来ない、依頼したエージェン会社まで走って扉を叩くがナシのつぶて、さてどうする？と一気に頭は回り出し、ひとりで次なる行動に移さねばならなくなったときの激しい焦り。たとえばトルコの Cappadocia 近辺をオートバイで走るとする。目的は決めずにあちこちへ移動、気の向くままに変化し続ける荒涼とした風景を自分のものにしていく贅沢と自在感。たとえばクロアチアの名も知れぬ村のバス停に降り立つと時間が止まったかのよう。人々も止まったままだが、瞬時、その、いかにもクストリツァ映画の登場人物らしき人々が動きだし、

私自身も一員となって映画に焼き付けられてしまったかの如き、妙な幻影と見知らぬノスタルジー。夜中、アメリカはユタの山中、車を走らせては疲れ果て、ヘッドライトも車内灯も消して休息したとき。降ってくるのはこのことかと思えるほどの空一面の星々。そして再び車を走らせて二時間後、ぼんやり山稜が明るくなってきたかと思うと、突然、目前に眩しく輝く光の海。真夜中2時のラスベガス、その衝撃。

旅は音を全身で受け止め、色彩に溶け込み、人々の匂いと濃密な視線の中を歩くことだ。それがぼくを見知らぬ感覚世界へと誘っていく。なんとも幸福な気分を満たされる。だから時間を見つけては、少しでも世界をひとりきりで歩きたいと思ってきた。次第にそんな贅沢は許されなくなったが、思いは常に見知らぬ場所にあった。

多くの作品制作に関しても同じで、思いは未知の世界をいかに作り出すかだった。ゆえに、創作作業ではいつも破壊と創造の境目を漂った。壊しては、新しく見たことのない世界を模索する。ただの新しさではない。あくまでも深淵に繋がり、この世界と異界を繋ぐ作業にす

3.11が問うたこと

3.11は激烈な衝撃をもたらした。あの震災・事件がなかったらパパ・タラフマラを解散することも、サバティカルへの応募もなかったと思う。しかしそれは、衝撃ではあったが予兆通りの結果とも言えた。予知能力がぼくに備わっているはずもない。あのとき、今にも切れんばかりの細々とした糸で現世界と結ばれていた深い部分の叡智が壊れ、断ち切られたかのように感じた。ただその可能性は1990年代半ばから漂い出し、それが壊れれば、もはや人間は立ち直れまいと思っていたから衝撃は一際であった。資金面の問題があったため、金の話ばかりが取り上げられもした。しかし些末ではないが一義ではなく、要はそれを成り立たせている我々自身の立脚点と哲学の問題が最大の疑念であった。21世紀に入って状況は芸術全般含めて悪化の一途を辿り、人はその流れに追随するのがトレンドとなって深みに嵌っていった。

3.11はぼくにすべてを捨てよ、と問うたのである。新たにやり直す勇気を持って、と語りかけたのだった。その覚悟が新たなパラダイムを切実な思いで生み出し、獲得することを可能にする、と。過去の経歴や形などなんの役にも立たないと噛みしめた。

思えば、パパ・タラフマラ時代も数多く海外を動いたが、それ以上にメタファーとしての旅の連続だったと思う。新しい風景、形に出会いたくて仕方がない。だから1996年からは普通に異文化圏の芸術家たちを作品に入れ込むことで、異を積極的に取り入れ、可能性を探った。あるいはぼく自身も外にしばしば出ては戻った。異文化のなかで自身を知るため、そしてそこから新たな別回路の作品を生み出すためであった。

なぜ、サバティカルか

3.11後、立ち返ってはぼくの原点を見つめ、旅のなか、素の状態に戻ってひとりきりの対話を行いたくなった。そこでサバティカルに応募したのだが、そのとき、脳裏にあったのは創作を欲した原点である。そもそも創作活動を行うようになったのは、多くの偉大な芸術家たちの、圧倒せんばかりの作品力がどれほど見る者、聴く者に生きる力を与えるか身を持って知ったからで、その力に鼓舞されるかのように自ら

創作してきた。なかでもアントニオ・ガウディ、ピカソ、ルイス・ブニエール等のスペイン人アーティストの作品群は大きな源泉力となったが、ヨーロッパはほぼ歩いたにも関わらず、スペインには足を踏み入れることができずにいた。だから真っ先にスペインに行きたいと思った。特にガウディを体感したかった。建築物は歩いてきてはくれない。その後、南下して、アラブ文化とアフリカ文化を味わうために、迷宮のモロッコ、音楽と美術のマリ共和国、セネガルへと移動し、それからトルコ周りで宗教が混在するイスラエルに滞在、帰り道、タイにも寄るという予定を組んだ。タイ以外はまったく行ったことのない国々である。特に楽しみにしていたのはマリ共和国で、マリの東部のサハラ砂漠にも行こうとしていた。

応募したのは2011年10月。この時点では円は高かった。幸運にも助成を得て、モロモロの調整を図り、実際に出発できたのは2013年1月2日だったが、すでに円は2011年10月に比べ約12%ダウン。それからもどんどん下がりサバティカル期間中に約18%下がる。かつ、応募段階で調査したエア一代に比べ、倍近い航空運賃が掛かることがわかり、仕方なく成田、パリ間の往復航空券を購入、あとは可能な限りLCC(格安航空会社)のフライトで乗り切ることにした。それでも航空運賃代は総額で60万円を超えた。最初は可能な限りの陸路移動を考えてはみたけれど、時間が許さず、飛行機での移動は必須だった。おまけに渡航期間中にマリ情勢が悪化、ぼくがマリに渡ろうとした10日前には日本人がアルジェリアで10名殺害される事件が起きた。その日、ぼくはアルジェリア国境近くのモロッコのサハラ砂漠にいたのである。それでも渡航しようと思っていたが、事前に連絡を取っていた在マリ日本大使館から絶対に来るなと厳命され、セゾン文化財団にも相談した結果、行かないことを決め、航空券のキャンセルを試みたが不可、カサブランカ⇒バマコ、バマコ⇒ダカールのエアチケットが無駄になる。そのようなこともあって、とにかく貧乏旅行になった。

スペインにて

パリを経て1月3日夜、スペインのマドリッドに入った。トレド、コルドバ、セビリア、バルセロナと歩く。マドリッド、コルドバ、セビリアではフラメンコを見た。観光客向けのショーではあったが、素晴らしかった。踊りも良かったが、それ以上に歌とリズムこそがこの芸術の主体だと知った。スペインの食事はおいしかった。90年代半ばから少しずつヨーロッパへの興味が薄れていったが、その多くは食事と全体の文化に依拠する。おいしい食事はなくはない。フランス料理やイタリア料理など、本格的な素晴らしいレストランに行けばうまいに決まっている。しかしアジアの料理に比べ、日常の食べ物は何とも淡泊。まずくはないがすぐ飽きた。もちろんヨーロッパと言っても単一には語れない、どうしてもなく飯のまずい文化圏もあれば、マシな文化圏もある。が、アベレージは低く、加えてヨーロッパの思考性、嗜好性に興味が薄れ、ヨーロッパ的なものに対し幻滅を覚えたため、特に西欧からは徐々に足が遠のいていった。

その点、スペインはマージナルな文化色が濃厚で、食ばかりか文化全体の嫌な感触も含めてのごった煮感があり楽しかった。どの街へ行っても美術館等には足を運んだ。ねっとりまとわりついた血、それがスペイン美術、美術館の印象である。特に素晴らしかったのはバルセロナのソフィア現代美術館。ブニエールの未見の映画とピカソ



2013年1月17日 ワルザザード-1

の「ゲルニカ」をはじめとして、多くの美術を見たが、ぼくにとっての白眉はこのふたつ。ともに「血」と「地」と「知」が渦を巻いていたのである。ガウディは圧巻であった。成長し続ける可能性を見ているような気分に陥った。人の意思が育って、可能性を残し続けるがゆえの幻惑。ぼくは中学三年の時に、ガウディの建築写真を見て建築家を志したが、その時感じたことがそっくりそのまま40年以上も経過して立ち現れ、母体内で抱かれているような安楽な気分に陥った。

モロッコにて

スペインは興味深い国ではあったけれど、所詮ヨーロッパである。それがモロッコに入って一変する。スペインとは海を隔ててすぐの場所に位置するが、初日、夜中にバルセロナからマラケシュに着いた途端にモロッコの迷宮にやられた。そう、モロッコを一言で現すならば、「迷宮感覚」。これは追々、街の情景と共に綴っていきたい。マラケシュではメディナと呼ばれる旧市街地の安ホテルに宿を取ってはあ



2013年1月17日 ワルザザード-2

たが、簡単には辿り着けず。空港からはタクシーを使って近くまでは行った。歩き出すと、色味も街路の感じもまったく同じようで、どこがどこやらまったくわからなくなった。最初は寄ってきた自称案内人たちを拒否して自ら探したけれど、1時間近くも巡り巡って諦めた。街は土色、ジェラバという民族衣装を着た人たちがネズミ男のように路地の隅に佇む真夜中。街角に立つ連中は金になるとなればすぐに寄って来た。

マラケシュから始まったモロッコの旅だったが、金の亡者たちとの付き合い合いとなる。15歳くらいのかわいらしい女の子がポン引きであったり、自ら売春婦となろうとしたり、マリファナ売りはそこかしこ、マラケシュの迷路にいる子供たちでさえ、多くが亡者のようであった。

次にワルザザードという砂漠の入口の街に入る。ここは砂嵐が一日の半分近く吹き荒れた。その時期は砂嵐の時期だという。砂の中、レンタカーを借りてカスバ街道を走った。そこかしこに土でできたカスバ(城塞)が点在し、砂嵐が吹くと、情景はすべて一色の茶色に変わる。木々も茶色。空にまで砂は舞い上がって、色味は単一となり、昼間なのにモノトーンの世界にいるような気になった。また、こんな環境ではなぜ砂漠の民が布をグルグル顔に捲いているかがわかる。砂は脅威だ。と突如、砂の中に湖が出現、まさにオアシスだった。

砂漠の中のベルベル人の小さな街、メルズーガを訪ね、ここからサハラに入った。サハラを案内してくれたのはベドウィンのガイドで、彼の家族はブラックサハラにいと流暢な英語で話した。学校には行っていないという。英語、フランス語、スペイン語、アラブ語、ベルベル語を話す彼の母語、母国語以外の語学はすべて、ガイドをしなが



2013年1月20日 サハラ砂漠-1



2013年1月20日 サハラ砂漠-2

ベドウィンでありながらも消費経済に巻き込まれていることを寂げに語る。事実、貧乏の悲しさにかこつけながら、砂漠の上でベドウィン商品を売りつけようと一所懸命だった。

この砂漠はさらさらの砂がなだらかな丘陵を作っており、日本人の抱く典型的砂漠イメージそのもの。たいがいは少しの草木やサボテン、石ころが転がって、砂漠らしくはないのである。

なだらかではあっても小高い砂山があり、砂に足を取られながら砂の山を登ると、風はかなり強い。稜線に沿って砂が舞い上がっては降ってきて、視界を遮り、呼吸器に入り込み、息苦しさで砂崩れによって真っ逆さまに転げ落ちそうになる。砂の恐怖はその中に入ると際限なく砂が増殖し、方々から沸き上がってくるかの如く感じられることだ。砂の織りなす景色に興奮しながら夢中になってカメラで遊んでいると、足がズボズボと散り、砂の溝に転げ落ちもした。途端に砂はからだの内側の隅々どころか、からだの穴という穴すべてに潜り込む。その後、からだ中から砂は何日にも渡って湧きだし、止まらなかった。

砂漠は美しいが瞬く間に脅威に変身する。1月のこの時期、日が暮れようものなら、砂漠はたちまち冷たくなって足から熱を奪っていく。ベドウィンの案内人は夜を徹して砂漠を歩くこともあるという。月の砂漠ならまだしも、夜、砂嵐の中では、ぼくのような部外者には恐怖で

しかない。彼らはそれでも歩く。感覚が育てた知があつてこそだろう。宿に戻って思い返してみると、タンジールに住みついてしまったアメリカ人作家、ポール・ボウルズがモロッコに魅せられた意味がわかったような気がした。底知れぬ感覚と迷宮から生み出された知の世界。

メルズーガからフェズ、シャウエンと歩き、メクネスへと辿り着く。フェズは迷宮都市として名高い。ぼくは昔からフェズに憧れ、今回も大きな楽しみにしていた。迷路状の道は幻感装置となって、人がヒョイヒョいと土色の壁から影のように現れ出ては消える。そこかしこに吊された、色とりどりで凝った細工のモロッコランタンが灯る頃になると、ますます幻惑感が増していく。土色の街は電灯周りだけがポツと浮かび上がり、子

供たちの喧噪ばかりが響きながら重く沈んでいく。時間の感覚が消えて場所感覚もなくなってしまえば、土色の迷路をグルグルと回り続けることになる。それは心地よかったが、結局は人である。フェズのやかましい商売人たちにはほとんどウンザリさせられた。ホテルの従業員は親切だったけれど、一歩外に出れば魔界となった。マリファナと売春、商売人は商品を売ろうと血眼だった。

それがモロッコだと思っていたが、メクネスに入ってその印象は一変。両都市ともに古都で、その距離は50キロだからまるで京都と奈良。にも関わらず街の感触はまるで違う。街に入ったのが祭りの日。至るところでラップ系の古楽器が鳴っており、ポカリと空洞に放り込まれたかのようで時代感覚が狂った。ホテルの場所がわからずウロウロしていると街角に立っていた青年が案内してくれたが、案内料は受け取らない。驚いた。他の街ならば必ず金を要求されたのに、ここでは誰になにを尋ねても金は不要。商売人たちはノンビリとして、買いたいならどうぞ、との態度を崩さない、無理に勧められることもない。街には瞑想音楽が鳴り響き、その音楽に釣られるかの如く、街を漂い、水パイプを吸い、伝統的水行商人から革袋に入った水を買って飲み、市街地の外からライトアップされて浮かび上がる旧市街を見つ



2013年1月25日 メクネス



2013年1月28日 エッサウィラ



2013年2月2日 ダカル

めた。夜の街の行商人たちも至って快活で、親切過ぎるほど親切だった。当然のように滞在日数は延びた。

音楽はモロッコのどこへ行ってもいつも耳にした。この旅はスペインから始まったアラブアンダルースの音楽の旅でもあり、ぼくはこの地域の音楽には昔からずっと惹かれてきた。特にメロディの美しさは絶品である。

セネガルにて

その後、エッサウイラ、カサブランカを経てセネガルのダカールに入った。夜中1時着。笑ってしまうほどダカールは危険がいっぱい。空港ですら、10メートルを勝手に案内した振りの青年2人が案内料だと言って10ドルを請求してくる。追い返してもオンボロタクシーを追い掛けて来てはボンネットを激しく叩いた。ダカールの街中は人間と車が混雑し、両者ともに道路に溢れ返っている。排気ガスが充満し、目が痛くなり、喉がガラガラになった。この街の危険度が夜、急激に跳ね上がるのは言わずもがな。セネガル人の肌の色は真っ黒だから夜になれば闇に溶ける。その中でぴかりと光るのは目ばかり。昼間でさえ危険に溢れた。知人の写真家はアフリカへ行ったら走って移動すると言っていたけれど、確かにノンビリ、ゆっくり歩いて、カメラをぶら下げていようものなら、すぐに狙われる。どう見たってこっちは外国人だ。たいがい外国人は車で移動し、外をノンビリ歩きはしない。いろいろな危険があるけれど、Tシャツ売りが近づいてきたらすぐに離れること。Tシャツでこちらのからだを隠し、と同時に数人の仲間がズボンから財布を抜き取ろうと一気に近寄る。人の少ない方にこちらが移動しようものならカモである。だから常に人の目を気にしながら移動せねばならなかった。

それでも毎夜、ぼくは音楽を聴きに出た。ライブハウスやアリアヌフランセーズで行われる音楽イベントに通い、すべての音楽が素晴らしかった。隣国、マリ共和国から逃れてきたアーティストたちが多く出演する演奏も聴いたし、美術館に行けば、その圧倒的な力量にこの国の嫌な面など瞬く間に吹き飛んでしまった。改めて人の進化とはなにかを思った。西アフリカの美術はもちろん、太古の芸術を目にすると、その凄みにタジタジとなってしまう。クロマニヨン人が15,000年前に描いたとされるラスコーやアルタミラの洞窟壁画以上の精神的表出を、果たしてその後の人類は再獲得できたのだろうか？ 人の作り出す音楽や美術はまさに心の表出である。それに対し、欲望渦巻くのはモノと金、権力に対する執着だが、その心が芽生えてからは、人が作り出す芸術は退化に向かったのではないか。金と権力への執着と浄化される音楽社会。ぼくは複雑な思いでセネガルを後にした。

イスラエルにて

イスタンブールを経て、イスラエルに入る。エルサレムに少々長く滞在して、この街を見て回ろうと思ったのだ。夜、ブラブラ歩いてもまったく危険性を感じない街だが、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地として、凝縮したエネルギーが各々凄まじい力で押し寄せ、重い空気がずっと澱んでいるようであった。聖墳墓教会というキリスト教会の中でさえ教会四派が分かれて他を遮断し、拒絶している。宗教は芸術と同じく、人であるがゆえに生じた隙間を埋めるものとしてなくてはならぬものだろう。けれど、宗教ゆえに人を殺し、富を奪い、権力を欲し、土地を占拠してきたのが人である。エルサレムでは否



2013年2月6日 エルサレム-1



2013年2月6日 エルサレム-2



2013年2月8日 ベツレヘム

応なく宗教の意味が打ち寄せる波の如く問い返されては、足はメディナに向いた。わかっていたはずが、宗教の迷路に入り込んだようになって、ぼくはメディナ内を幽鬼のように歩き続けた。

そこでベツレヘムに逃れた。ベツレヘムはパレスチナ自治区の一部であるにも関わらず簡単に行き来できる。しかし物価も人の感触もまるで異なり、この街はエルサレムとは別の意味でジットリと澱んで、晴れない。イスラエルとの間にそびえ立つ壁があって、そこに殴り書き

根を張る日々

手塚夏子
Natsuko Tezuka

されていた文言。

「This is illegally occupied land. State of Palestine 194」

次にテルアビブへ向かう。テルアビブはきれいだったが、アメリカの一部であるかの如き状態をしばしば見せつけられ、居心地は悪く、ここも気分が晴れない。イスラエルでは人であることの意味をずっとぼくに問い続けたのだった。

それからパリ経由で一旦2月14日に東京に寄り、公演を行って再びサバティカルの続きで2月25日にタイのチェンマイに行き、東京に戻った。それが3月8日のことである。

旅の記憶

さて、この旅がどういう結果をぼくにもたらしたか、そんなことは簡単にとは言えない。旅は将来に渡って不断に自身に問い掛けてくるものだからだ。それは記憶となって染み付き、私のからだに澱のように残る。見た物、聴いた音、空気の感触、時間の流れ方、匂い、温度……これらが一体となって今後のぼくを形作っていくだろう。それが旅であり、旅の意味だ。

サバティカルでは素晴らしい時間を頂いた。今後、どう生きてくるかはぼく自身の楽しみでもある。感謝。



Photo: Minsa You

小池博史(こいけひろし)

演出家・作家・振付家・舞台美術家、'舞台芸術の学校' 校長、「小池博史ブリッジプロジェクト」代表。茨城県日立市生まれ。1982年「パパ・タラフマラ」設立。以降、全55作品の作・演出・振付を手掛け、35カ国で上演、国際的評価を確立。その他の作品も各国で多数制作。つくば舞台芸術監督、アジア舞台芸術家フォーラム委員長、国際交流基金特定寄附金審議委員等を歴任。2012年5月、パパ・タラフマラ解散。翌月、「小池博史ブリッジプロジェクト」発足。「ブリッジプロジェクト」では教育、創造、発信を三本の柱とする。創作では、現在、宮澤賢治シリーズと「マハーバーラタ」シリーズをアジアの古典アーティストと共に展開中。

<http://kikh.com/>

それまでの人生

ずっと閉塞感を感じていた。いつの頃からなのだろうか？ ありのままに生きられない。お互いどうし監視しあっているような窮屈さ。表面的に見えている物事と、実際その下で起きていることの乖離、そういったことを薄々感じていたのは子供の頃からだったと思う。けれども、それを具体的に観察することに快感を覚えるようになったのは、痛みの味を知った大人になってからだ。そして、演劇やダンスや文学や映像作品を作っている人たちに会った。けれど、何がよくて何が悪いか？ たくさんの価値観の海の中で、情報を処理しきれないと思ったとき、自分が本当にどう感じているか？ から出発して物事を試行錯誤していいんだ、と思うことができた。いろいろ実験していてもいいのかもしれない、と思えた。今ある何かの価値を選択して自分の足場を決めるのではなく、足場だと思っていたところを疑って行きながら、価値観の可能性を問い続けるという方法があると思えた。だから閉塞感にも向き合って生きて行ける、そういう前向きさが私の根底にはあったように思う。けれども震災が起きた。

震災が起きた

2011年3月11日以降、震災によって起きた原発事故、放射能漏洩、情報操作、利権を追求する企業の態度、そちらに追従するのが常識の企業世界と、起きていることに向き合いきれずに分裂していく人々の価値観、そういった一連の動きの中で、私も前向きに観察することが難しい精神状態に追い込まれていった。一番大きかったのは、とにかく「不安」というものだったと思う。具体的には自分の子供の安全に対してである。こういった不安は理屈ではなく、自分の体の深いところに作用してくる。実際のデータであるとか、証拠であるとか、情報の正確さであるとか、そういったこととは関係なく、不安は体を蝕む。もう一つは、自分が世界を認識していたその様が、実際の世界とは違った、という感覚である。価値観を固定しないでいたいという思いで試行錯誤して来たつもりだった。けれども、それはほんの一部にすぎなかったのだ。与えられた情報の中からある程度都合よく自分を安心させるように世界を認識しようとしていたのだ。だから、現実に向き合ってはいなかったと言っても過言ではない。結局は様々な依存の中に自分を置いていたのだ。その意味で、むき出しの現実がグロテスクな姿をさらし始めていると感じたときの恐怖といったらなかったのだ。自分がこれからどのように生きて行くか？ 今まで生きて来た物事の延長線上で生きることはできない、と感じると同時に、その足場のなさ、規範のなさは本当に不安をもたらす要因になっていった。